

## C-2 地方王権

### 254. 地方王権とは

歴史を異にする東南アジア海域の島々が今日インドネシアという一つの国として存在するのはこれらの地域がオランダ植民地に統一されたという経緯を経るからである。インドネシアはオランダ植民地体制の下で初めて一元的な地域のまとまりとなった。

インドネシアの歴史はジャワ島を中心に展開されてきた。クディリ王国(→245)、シンガサリ王国(→246)の頃、ジャワは他の島々に遠征軍を派遣した。実際に今日のインドネシア地域全体に及んだのは14世紀のマジャパヒト王国(→248)である。しかしマジャパヒトのような広大な帝国はインドネシア歴史において例外的な存在であった。

ジャワ島以外のスマトラ島やその他の島々では別個の王国がジャワの王国とは緊張関係と友好関係を保ちながらジャワ王朝とは無関係に存在して各々の栄枯盛衰を辿っていた。ジャワ島においてさえ西部ジャワにスダ人(→612)、マドゥラ島にマドゥラ人(→614)と別の民族が割拠しておりジャワとは別の政権が存在していた。

本 C-2 章ではジャワ以外の王国の衰亡をまとめたものである。ジャワ島であってもパジャジャラン王国、バンテン王国、チルボン王国、マドゥラ侯領はジャワ人の王国でないという意味で本章に包含した。

スリウィジャヤ王国(→255)の所在地はスマトラ島であるが、その覇権はマラッカ海峡を通して東南アジア海域に及んだ。過去のインドネシア歴史の栄光を称えるためにマジャパヒトの名とともにしばしば引用される大帝国である。

アチェ王国、ゴワ王国、テルナテ王国もその影響が広く領域の外に及んだという意味では地方政権とはいにくい。

ジャワ・バリ以外の外島の大小王国に共通する特徴は商業国家の性格が強いことである。ジャワ島とバリ島の王権は水田耕作の上に立つ《農業本位的》であり、これに対して外島の王権は港における交易の上にたつ《商業本位的》である。

オランダなどヨーロッパ勢力は始めは下手に<sup>したて</sup>出て王国に接近し、交易の拡大を図った。やがてオランダの力が増して王国と競合関係になるとオランダは宮廷の権力抗争に関与し、王国は弱体化させられた。

地方に陣取る王家の運命も様々(→279)である。いくつかの王国はオランダ支配に抵抗して廃絶された。存在自体が邪魔になるため言いがかりでもって廃絶させられた王国もある。存続した王家は植民地支配に人畜無害になるまで貶められ、「土侯」といわれた。

一方ではスマトラ島やカリマンタン島でプランテーション拡大を意図したオランダ植民地帝国は住民支配の便宜のため、新たにサルタン国が盛りたててられて植民地体制に組み込まれたものもある。

### 255. スリウィジャヤ王国

インドと中国を結ぶマラッカ海峡経由の海上ルートが賑わうにつれ、スマトラ島は交通の要衝にあることから東西交易の港市が繁栄した。スマトラ島でも王国の盛衰はあったが、7世紀に勃興した「スリウィジャヤ

(Sriwijaya<sup>1</sup>)王国」は特別である。

王国の版図はスマトラ島からマレー半島に及び、現在のタイ国南部のリゴールからスリウィジャヤ王国の碑文が出土している。8世紀にはカンボジアを従え、その覇権は東南アジア全域に及んだ。セイロン(スリランカ)の歴史にもスリウィジャヤ王国の支配が及んでいたという記録が残っている。

スリウィジャヤ王国は港市国家であるから領土支配ではなかったが、広大な領域はまさに帝国であり地方王権の範疇<sup>はんちゆう</sup>を逸脱するものである。独立の父スカルノ初代大統領の愛国心を鼓舞する演説にはインドネシア栄光の歴史の証としてマジャパヒト(→248)とスリウィジャヤの両王国の名が並び称されて引用されてきた。

港市としてスリウィジャヤ王国が抜きでたのはムシ河口<sup>2</sup>にあり、流域を後背地にした経済力であろう。ジャワ島の王権が基本的に農業を基盤にしていた農業王国であることと対称的であるが、ジャワのサイレンドラ王国(→243)とも姻戚関係にあったらしい。

通商国家であることからインド文化の影響を受け大乘仏教を信奉していた。スマトラ島に仏教王国の繁栄していたことが中国の7～9世紀の唐書に記載されている。「室利仏逝」あるいは「三仏齊」の名で登場する王国がスリウィジャヤ王国とされている。

スリウィジャヤ王国の所在地は南スマトラ州のパレンバン(→102)付近と推定されているが、王都の遺跡は明らかでない。ジャワ島の王国はボロブドゥール(→126)の遺跡を残したが、スリウィジャヤ王国の方にはそのような巨大な遺跡はなく、パレンバン周辺から発掘される寺院遺跡からの仏像がスリウィジャヤ王国に栄えた文化の一端をしるばせる。

ジャカルタ国立博物館(→159)に石仏が陳列されており、パレンバン付近出土との説明のみで詳細は記されていない。スリウィジャヤ王国の権勢を考えるとボロブドゥール遺跡を上回る遺跡があっても不思議でない。

王国の滅亡時期は明らかでないが、マラッカに伝わる『スジャラ・ムラユ(Sejarah Melayu=ムラユ史)』に記載されている建国伝説によれば、戦いに破れたスリウィジャヤ王国のパラメスワラ(Parameswara ?-1413)王子がマラッカ(→032)に逃れ、15世紀初めにマラッカ王国を建国した。

マラッカ海峡の中央のマレー半島側に位置したマラッカ王国は交通の要所としての優位性から香料などの交易を独占によって栄え、スリウィジャヤ王国の繁栄を引き継ぎマラッカ王国の名はヨーロッパにまで響いた。

今日のマレーシアは国王を抱く立憲君主国である。マレー半島にあった9家の王室も何らかの形でマラッカ王国に由来することを誇っている。その意味ではスリウィジャヤ王国の後裔が今日のマレーシアであるといえることができる。

⇒101.ムシ河流域

## 256. サムドゥラ・パサイ王国

インドと中国を結ぶ海上交通の発展とともにマラッカ海峡(→032)沿岸に港市が栄えるようになった。マルコポーロは1292年に中国から海路ペルシアに向う際に北部スマトラのサムドゥラ(Samdera)で5ヶ月風待ちをしたと述べている。サムドゥラ(サマトラともいう)は中継貿易の地点であり、スマトラの語源といわれる。

サムドゥラは現在のアチェ州ロックスマウエ(→083)近辺のパサイ川河口近くの港であり、パサイ川のやや上流にパサイ(パスマンともいう)が隣接していた。パサイ川は地図で探しても分からない小さな川である。風待

<sup>1</sup> Sriwijaya はインドネシア語綴りであり、英文では Srivijaya と記されている。

<sup>2</sup> <編者註>パレンバンのことであるが、スリウィジャヤの都はここではなかったと鈴木俊氏は指摘している。

ちに適した地形であったと思われる。

最古のマレー歴史文学である『パサイ王国物語(Hikayat Raja Pasai)』によれば、1297年にスルタン・マレック・サレー(Sultan Malek Saleh)王とするイスラム教の最初のサムドゥラ・パサイ王国ができた。サムドゥラは港であり、上流のパサイに王国があった。建国伝説によればマレック・サレーは大竹姫と象に育てられた男の間にできたという。

大竹姫は竹の中から発見された見目美しい女の子である。いうまでもなく日本の『竹取物語』と同じ設定であることは単なる偶然とは考えにくい。ちなみにその他にも日本とインドネシアの共通の昔物語(→1000)がある。

サムドゥラ国とパサイ国は兄弟が分かれて支配し、両者が反目して抗争したこともあるが、統一されてサムドゥラ・パサイ王国になった。1350年にガジャマダ(→335)の派遣したマジヤパヒト王国(→248)に一時占領されたこともある。

アラブ人の旅行家イブン・バトゥータ(Ibn Battuta)が1364年にインドから中国に行く途中にサムドゥラを訪れた際にはサムデラがアミニズム信仰からイスラム教に改宗したことを述べている。住民はイスラム教であるが、町は柵で囲まれて、いくつかの木造の櫓があり、回りの原住民は人を食べる野蛮人であると述べている。多分、バタック人(→608)のことであろう。

サムドゥラ・パサイ王国<sup>3</sup>はマラッカ海峡におけるイスラム教を奉じる港市国家の先駆け<sup>4</sup>であり、マラッカ王国、アチェ王国が後に続く。イスラム学問の地としてマレー語のアラビア文字表記が行われた。イスラムのマレー文化の創始者である。

この地はマラッカ海峡に臨む交易の地であると同時に、後背地のスマトラ山地で産出する金、龍腦の輸出港であった。さらにインドから移植された胡椒の栽培が行われていた。

マラッカ海峡の対岸にスリウィジャヤ王国からの亡命王子パラメスワラによってマラッカ王国が1403年に建国された。パラメシュヴァラはサムドゥラ・パサイの王女と結婚し、王国の繁栄はマラッカ王国と共有するようになった。

マラッカ王国がポルトガル(→270)に占領された際にサムドゥラ・パサイ王国が繁栄を取り戻したこともあるが、1524年アチェ王国に統合された。王国の滅亡でマレー人は分散したと思われる。

## 257. アチェ王国

マルコポーロの『東方見聞録』によればスマトラ島北端のアチェ地方はすでに1292年にイスラム教化していた。インド洋からマラッカ海峡の入口となる通商の要衝の地であるバンダ・アチェの地に新しい港市を基盤に「アチェ(Aceh)王国」が勃興し急速に発展したのは1520年以降のことである。当時のアチェの王都は各国からの商人や学者の集まるコスモポリスであった。

アチェ王国の興隆はマラッカ王国(→032)の盛衰と関連している。マラッカ海峡の中央のマレー半島側に位

<sup>3</sup> 鄭和の艦隊が訪れた頃、サムデラ・パサイ王国は内紛で乱れていたが、鄭和艦隊の使節の裁きで収まった。王国は明に恩義を感じて忠誠を誓うようになった。⇒宮崎正勝「鄭和の南海大遠征」

<sup>4</sup> <編者註>現在東南アジアで信仰されているイスラムはシャフィー派であり、これはサムドゥラ・パサイのマリクル・サレー王が広めたもの。

置するマラッカ王国は東西貿易で繁栄したが、香辛料を渴望するヨーロッパの餽食<sup>えじき</sup>となり、1511年にポルトガル(→270)に占領された。

イスラム教を奉じるアチェ王国はマラッカ王国の正当な後継者であると自認した。インド洋を往来するイスラム商人はポルトガル即ちカトリックの支配するマラッカを避けたため、マラッカ王国に代わってアチェ王国が繁栄した。アチェの強みは後背地のスマトラ島の胡椒生産を支配していたことである。

当時のマラッカ海峡の通商支配は、①アチェ王国、②マラッカに陣取るポルトガル、③マラッカ王国の亡命先のジョホール王国、と三つ巴戦になっていた。その中でもアチェ王国はスルタン・イスカンダル・ムダ(Sultan Iskandar Muda 在位 1607-36)の治世に黄金時代を迎えた。イスカンダル・ムダとは若いアレキサンダー(→944)の意味である。

アチェ王国はマラッカ海峡を支配し、ポルトガルの占領するマラッカをしばしば攻撃した。また対岸のマレー半島側(クダとペラ)にも領土を拡大した。

その後、王国はタジュール・アラム女王(1641-75)の支配でスルタン・イスカンダル・ムダ時代の緊張は緩和され、商売はかえって賑わったという。その後も続けて3人の女王が即位する。しかしこの間に王権は弱体化し貴族の勢力が強くなり、ウレーバランという貴族層が王を選出するようになった。

1824年の英蘭協定(→276)でスマトラ島がオランダの勢力圏となった際もアチェ王国の独立は保証されていた。アチェ王国はトルコに大使館を設け、アメリカとの貿易の振興を図るなど外交政策を展開しながら、オランダとイギリスの勢力均衡の中で独立を維持した。アチェ王国の経済基盤は同地で生産する胡椒貿易であった。

19世紀後半になってスマトラ島への他国の介入を恐れたオランダは懸案のアチェ王国征服に乗り出した。30年に及ぶアチェ戦争の開始である。王国はスルタンを中心に結束して一度は撃退するも、1878年、降伏しオランダの宗主権を認めた。

しかし1884年、アチェ王国は再びオランダに反乱した。1903年にスルタンは降伏し、由緒ある王国はついに廃絶された。その後もアチェ戦争は継続したが、イスラム教徒の異教徒に対するジハード(聖戦)でアチェ王国とは関係ない。アチェ王国の栄光は今日もなおアチェ人の誇りであり、アチェ独立運動(→435)のマグマとなっている。

⇒083.アチェ州、281.アチェ戦争

## 258. ムラユ王国

「ムラユ(Melayu)王国」はジャンビ地方(→100)に7世紀後半に興ったマレー人の古代王国である。12世紀頃に繁栄した後、次第に衰退した。南のスリウィジャヤ帝国(→255)との関係は従属していたのか、あるいはムラユ王国自身がスリウィジャヤ国の後継なのか不明であるが、何らかの関係はあるらしい。

ムラユ王国の歴史的事実もさることながら意義深いのは“ムラユ”という言葉である。今日もムラユという言葉はマレー語で“マレー”という意味の固有名詞として生きている。ちなみにマレーはムラユの英語読みである<sup>5</sup>。

マレー人の習性は沿岸に住むことで、このようなマレー人の拡がりからムラユ(マレー)語は島嶼地域の共通語となり、それを基にインドネシア語(→957)が形成された。

<sup>5</sup> <編者註>マレーを意味する malaya と melayu の名前は同語源であり、これはサンスクリット語で「丘」を意味する。マラッカ海峡の北側ではもともとの malaya という形を保持し、南側では発音が変化しタミル語系の melayu となった。Slamet Muljana

マレー人は今でこそインドネシアとマレーシア(→462)の二つの国に分れて国境を隔てた別の主権国家の下の国民であるが、もともとは同一の民族である。ちなみにブルネイもマレー人の国である。

ムラユの頂点ともいべきマラッカ王国は 1526 年ポルトガルに占領され、王国の残党はマレー半島先端のリアウ諸島に遁走したが、主力はジョホール王国に結集した。

マラッカ海峡の交易をめぐりアチェ王国、ジョホール王国、マラッカのポルトガル、新興勢力のオランダが加わり、その時々<sup>しのぎ</sup>の同盟の組み合わせで鏑を削った。まず最初に 1641 年オランダとジョホール王国の連合軍に包囲されポルトガルが勢力をなくした。次にジョホール王国はオランダに圧迫され交易から遠ざけられた。残る選択肢は海賊稼業を生業として海峡に残るか、内陸部に小王国として逼塞するか、のどちらかであった。

16世紀頃からジャンビ地方ではイスラム教に改宗したマレー人のジャンビ王国が復活した。バタン・ハリ河の上流では金が産出され、下流のジャンビ王国が商権を握っていたからである。

その他の有力なマレー人王国にシアク(Siak)河の下流に18～19世紀に栄えたシアク王国がある。同王国はジョホール王国の一族がシアクに来て創設したものでアラビア系混血のサイドアリ王(1791-1810)の時代が最盛期であったが、内紛から国威は低下しオランダとの条約で保護国になった。

マラッカ海峡に面する東スマトラの沿岸には海峡に注ぐ河毎にタミアン、ランカット、デリ、スルダン、バトゥ・バラ、アサハン、パナイ、ビラという小さな王国が割拠していた。小王国は北のアチェ王国が支配していたが、南のシアク王国も宗主権を主張した。

これらの地域はプランテーション(→505)適地であったため、オランダはこれらの小王国を独立させスルタンの称号と王権を認めた。代わりに外国人に土地租借を行い経済的に潤い、オランダと共栄関係にあった。このためインドネシア独立の嵐の中で革命が叫ばれた際に、少なからぬ王族が民衆の攻撃を受けて犠牲となった。

⇒605.マレー人、606.ムラユ語

## 259. スマトラの諸王朝



パガルユンの王宮博物館

西スマトラのバリサン山中の肥沃な盆地にミナンカバウ人のパガルユン(Pagarruyung)王家があった。伝説によればスグンタンの丘(→101)に降臨した3王子の兄がミナンカバウ王に迎えられた。ミナンカバウ人はスマトラの諸民族にとって宗家の位置づけになる。

ところが史実ではジャンビ王国の王族のアディティヤワルマン(Adityawarman)はマジャパヒト(→248)の宮廷に勤めた後、1347年、スマトラ島に帰りパガルユンに王権を建て、ミナンカバウ王国となったことが明らかにされている。

パガルユンのミナンカバウ王国は金や森林産物は東に流れる河によって東スマトラに運んだが、河を任意に選択できることにより川下の港市を支配した。山中の王国がこれほど権威を持つのは例外的存在であった。しかし王家の勢力は18世紀末に衰え、ラッフルズ(→338)がパガルユンを訪れた時に王都は既に荒廃して

いた。19世紀のパトゥリ戦争(→278)で完全に消滅したが、パガルユン王家はミナンカバウ人のアイデンティティとして生きている。

南スマトラではスリウィジャヤ王国のあったパレンバンの地に16世紀後半にジャワから来た領主が開祖となってパレンバン王国というイスラム王国が復活した。

パレンバン王国はマタラム王国(→250)の宗主権の下に胡椒の生産を行っていたが、1625年、オランダ東インド会社 VOC(→272)の高まる圧力に屈して交易独占権を譲った。その後バンカ島(→104)で発見された錫もオランダが権益を得た。資源にめぐまれ裕福な地域であったためオランダは王室の内紛に乗じ 1825年王国を解体し直轄領<sup>6</sup>にした。

スマトラ島の王国に共通するのはアレキサンダー伝説(→944)である。スリウィジャヤ王国の起源伝説によればアレキサンダー(マレー語でイスカンダルという)の子孫が輝きとともに山の上に白い水牛に乗って降臨した。スマトラ島に散在していた諸々の王国は王国の起源をスリウィジャヤ王国かマラッカ王国につながることを誇りとしていた。

北スマトラ山中のバタック王国は少し様相が異なった。キリスト教宣教師がオランダに助けを求めたことを口実に、1872年にオランダはバタック人の陣取るスマトラ島内陸部に兵を派遣した。バタック王シンガマンガラジャ(Singa Mangaraja) 12世はオランダの侵略に抵抗し「バタック戦争」になった。バタック人の北部タパヌリ地区が主力であったことから「タパヌリ(Tapanuli)戦争」ともいう。

バタック人は種族に分かれて抗争していたためバタック全体を支配する王はいなかったが、タパヌリの王がバタックを代表していた。王制は特殊で1世から12世まで続いたが、特定の血統でない。大村太良著『シンガマンガラジャの構造』によれば神聖王として司祭の役割で、チベットのダライラマのような存在らしい。1907年、シンガマンガラジャ12世の戦死でバタックの王系は絶えた。王の肖像は紙幣になっている。

⇒609.ミナンカバウ人、607.バタック人

## 260. パジャジャラン王国

西部ジャワが中部ジャワより早くから拓けていた証拠として、ボゴール(→113)近くのチャンペア村で発見されたタルマ(Taruma)王国のプルナワルマン(Purnawarman)王の碑文の出土があげられる。石に刻まれた絵のような文字は南インドのパッラワ文字(→960)で5世紀のものである。コピーは博物館にあるが、本物のあるチャンペア村への訪問はかなり不便な所である。ちなみに2002年、このバトゥ・トゥリス(字のある石)の下に宝物があるとお告げがあり、政府の支援で穴を掘ったが何もなかった。ジャカルタのトゥグー(→166)からもタルマ王国の碑石が発掘されている。

しかしその後のジャワ島の歴史が中部・東部ジャワを中心に展開した中で、西部ジャワのスンダ人の王権として明らかなのは「パジャジャラン(Pajajaran)王国」である。

碑文によればバラジャラン王国 1333年にラトゥ・デワタによって始められ、ボゴール付近のパクアン(Pakuan)を本拠地としていた。折から東ジャワでマジャパヒト王国(→248)が繁栄していた。マジャパヒト王国

<sup>6</sup> パレンバン王国は17世紀に勢力を高めたが、VOCと胡椒の商権をめぐる戦争に敗れ、VOCが胡椒、錫の輸出を独占するようになった。パレンバン王国はラッフルズのジャワ支配当時にオランダに反乱した。王国最盛時のマフムッド・バダルディン(Mahmud Badaruddin)王の名にちなみパレンバン空港はマフムッド・バダルディン空港と命名されている

は東南アジアに覇権を唱えた大帝国であるが、西部ジャワのパジャジャラン王国はシリワンギ(Siliwangi)王<sup>7</sup>の下に独立を保ち、その傘下に組み入れられなかったことがスンダ人の誇りである。

ジャワとの関係の有名な歴史のエピソードを紹介しておく。マジャパヒトのハヤム・ウルク王(→248)の王妃としてパジャジャラン王国の王女が迎えられることになり、シリワンギ王はこの上ない光栄として娘を連れてマジャパヒトの地へ乗り込んだ。

ところがマジャパヒト側のガジャ・マダ大臣(→335)の使者からこの結婚は正式な王妃でなく妾であることを告げられた。この背信行為にシリワンギ王は怒り、戦となったがもとより多勢に無勢でパジャジャラン側は全員が殺され、娘も自害した。

要するに結婚話はシリワンギ王を誘き寄せるために仕組まれたガジャ・マダ大臣の罠<sup>わな</sup>であった。この歴史挿話は今日もスンダ人のジャワ人不信となって潜在意識にある。

シリワンギ王の不慮の死で一時は従属したが、パジャジャラン王国はマジャパヒト帝国から独立を保ち続けた。王国は独自に貿易を行い、1522年にポルトガルと条約も締結した。しかしその後、西部ジャワの沿岸に勃興したイスラム教のバンテン王国が勢力をまし、パジャジャラン王国は次第に内陸部に押しやられ1578年に滅びた。

バンドウンの40km東のスメダン(Sumedang)にスメダン王国があり、パジャジャラン王国と同盟関係(属国?)を保っていた。スメダン王国のプラブ・グサン・ウルン(Prabu Geusan Ulun)王はパジャジャラン王国が滅びる際に同国の亡命貴族を迎え入れたため、パジャジャラン王国のプサカ(→704)はスメダンに移った。

その後、スメダン王国はスルタン・アグン(→337)に服従したが、パジャジャラン王国のプサカはスメダンに残されたため、今日ではスメダンのプラブ・グサン・ウルン博物館でパジャジャラン王国のよすがを偲ぶことができる。

⇒612-3.スンダ人

## 261. バンテン王国



Cornelis de Houtman

ヨーロッパから香辛料を求めた商船が東南アジアに辿り着いた頃、ジャワ島の西端には「バンテン(Banten)王国(バンタムともいう)」が栄えていた<sup>8</sup>。王国はワリソゴ(→712)の一人スナン・グヌンジャティの子のハサヌディン<sup>8</sup>を初代とするイスラム教を奉じる新興国として1556年頃に建国した。

当時のバンテン港は胡椒を積出す港市国家であり、アチェ王国、マラッカ王国などと並ぶ東南アジアの交易のセンターであった。バンテン王国の最盛期はパジャジャラン王国を滅ぼして西部ジャワを支配し、王国の覇権は南スマトラへも及んでいた。

1596年、オランダのハウトマン船長(→271)はポルトガルの影響下にあるマラッカ海峡を避けてスンダ海峡(→037)経由でバンテン港に到達した。王国のオラン

<sup>7</sup> シリワンギ王はブルブ・マハラジャともいう。マジャパヒト王国の謀略による死亡時期は1351年 or1357年の2説ある。

<sup>8</sup> バンテンギラン(バンテンから13km内陸部)には古くから王国があり、スリウィジャヤ王国やパジャジャラン王国に従属していた。イスラム教徒が港を乗っ取りバンテン王国を建設した。バンテン王国はイスラム教に改宗した多様な民族から構成されている。〈編者註〉原注の「バンテンギラン」がPandai Gelangの読み違いだとするとこの町は現在のPandegelangとなるが、バンテン港からは約35km南方となり、話が合わない。

ダに対する一交易者として扱いに不満が嵩じたオランダ東インド会社(VOC)(→272)は王国からフリーハンドを得るためバンテンから70 km東のジャコトラ(→153)に商館を移した。

王国はオランダのライバルのイギリス(→273)と組み、バタビア(ジャコトラを改名)のVOCを攻撃したが失敗し、西部ジャワ沿岸ではバタビアが新たな交易の拠点としてバンタムと競合した。

当時ジャワ島では中部ジャワのマタラム王国(→250)の興隆期でジャワ全島を征服する機運にあり、VOCの占拠するバタビア商館の攻略に向かった。マタラム王国を恐れたバンテン王国はVOCとマタラムの戦争を傍観した。マタラムの攻撃をしのいだVOCは次にバンテン王国を服従させようとした。

王国の6代スルタン・アブドゥルファターはVOCに対抗し、交易の繁栄を取りもどした。一方、長子グスティは1676年メッカ巡礼から戻り、副王ハジ王と名乗って王国の将来をVOCとの協調路線にかけた。王国の副王制度という権力機構は王国を分裂させた。

親子対立の内乱<sup>9</sup>はVOCの乗じるどころとなり、バンテン王国は骨抜きとなった。VOCはバタビアへの貿易集中をはかるため、バンテン港の交易は閉ざし、外国商人をバンテン港から追放した。イギリス商館がジャワ島を撤退してスマトラ島のブンクル(→099)に移ったのはこの時である。

一般にイスラムの王宮は町に開放されているが、バンテン王宮は保護の名のもとに壁を高くして閉じ込められていた。実質はVOC支配の形骸化した王国であったが、1748年に王国の中の反オランダ派は反乱を起こし、鎮圧に3年かかった。1815年にバンテン王国は廃絶され、その際にスロソワン王宮は破壊された。

近年、王宮遺蹟が発掘されており、宮殿を巡る水の配置が高度の技術が文化の高さを物語っている。遺跡博物館には中国の陶磁器に混じり伊万里などの日本の陶磁器も発掘されており、バンテン王国の栄華が偲ばれる。

VOCは農業に基盤をおく王国にはそれなりの利用価値を認めたが、交易に基盤をおく港市王国はライバルとして容赦しなかった。

⇒115.新バンテン州

## 262. チルボン王国

西部ジャワ東端の中部ジャワとの境界近くのチルボン市に王国があった。チルボンはジャワ海に面した古い港町で世界各地からの商人が集う港市であり、商人とともにもたらされたのがイスラム教である。チルボン王国はワリソゴ(→712)の一人スナン・グヌンジャティを開祖とする王国であり、バンテン王国(→261)とは親戚関係になる<sup>10</sup>。

メッカで修業したイスラムの伝道者スナン・グヌンジャティはジャワ島へ征服者として赴き、チルボンを根拠地として布教を行い1570年頃死んだ。墓所は海岸沿いのチークの丘にあり、敬虔なムスリムがお参りする。ちなみにグヌン・ジャティ(Gunung Jati)とは「チークの木の間」という意味である。

チルボン王国は西部ジャワのバンテン王国と中部ジャワのマタラム王国(→250)の間にあること、さらにオランダ東インド会社VOC(→272)というジャワの諸々の政治勢力の間にあつて緩衝<sup>かんしゅう</sup>の役目を果たしてきたが、1632年にマタラム王国の属国となった。

その後、VOCの勢力が抜き出るに従い、1677年にその保護国となり、1705年には完全に主権を取り上げ

<sup>9</sup> インドネシアではVOCと通じた息子を批判し、父親を英雄としている。

<sup>10</sup> <編者註>スナン・グヌンジャティはまずバンテン王国を建国し、それを息子に譲ってチレボンで引退生活に入ろうとしていたが、現地の人たちの強い勧めで1552年にチレボン王国を建国した。



られた。この間にチルボン王家はカस्पハン(Kasepuhan)、カノマン(Kanoman)、クチルボナン(Kecirebonan)の3家に分裂させられた。マタラム王国がスラカルタ家とジョグジャカルタ家に、更に分割されて4家になったと同じ理由である。王家のエネルギーをオランダでなく、ライバルの王家同士に向けさせる企みである。徳川幕府の本願寺の東西分割も同じ発想である。

マタラム王家と比ベチルボン王家へのVOCの扱いが厳しかったのはVOCに対する王家の抵抗が強かったことへの報復らしい。しかし廃絶されても追放されなかったのはチルボン王国の由来がワリソゴにさかのぼる由緒正しい王国として一目置かれていたからであろう。歴史的にはマタラム王家のスラカルタ家やジョグジャカルタ家より古い家柄の王家である。

今日ではカस्पハン家のクラトン(王宮)は観光客に解放され、かつての王国時代のガムラン、バティック、クリスなどの宝物を陳列する博物館となっている。展示品の目玉である王の乗り物である馬車は、シンガ・バロン(Singa Barong)という象の頭、鷹の翼、竜の脚を持つ架空の動物である。象はインド、鳥はイスラム、竜は中国を意味している。これらはチルボン文化の象徴である。

チルボンの王室は中国人と婚姻関係にあったため、中国の影響はチルボンのバティック(→927)模様や結婚式の龍の布飾り、あるいは新婦の黄色の飾りに見られる。

その他の王家のクラトンでは敷地の一角の建物に子孫が住んでいるらしいが、かつての王宮には鶏や山羊が放し飼いにされ、子供が<sup>たこあ</sup>ん揚げして遊んでいる。王家は昔に廃絶され没落の有様を示しているにもかかわらず、チルボン文化の保護者としてチルボン王家は存続しているごとく伝統を維持してきた。

⇒118.チルボン市

## 263. マドゥラ侯領

豊沃なジャワ島にかくも接近しながら狭いスラバヤ海峡を隔てただけのマドゥラ島の大地は貧しい。ジャワ本島のジャワ人と異なるマドゥラ人の本拠地であるが、ジャワ島の歴史との関わり合いは避けられない。マジヤパヒト王国を築くウイジャヤ(→247)が天下統一に乗り出した際にはマドゥラ島から援軍が駆けつけた。

15世紀頃、小王国の分立していたマドゥラ島はマジヤパヒト王国の家臣によって統一された。16世紀にはイスラム教に改宗した。1624年、マドゥラ島はマタラムのスルタン・アグン王(→337)に征服され、在来のパラカラン(Palakaran)家がカラニグラット(Cakraningrats)家<sup>11</sup>と名を改めてマドゥラ島の支配が認められた。

マタラム王国の保護領であったカラニグラット家はラデン(Raden=貴族の意味)と名乗り、王とは称していない。マドゥラ王国でなくマドゥラ侯領である。しかし、マドゥラ島の歴史はしばしばマタラム王国の支配に逆らい、マドゥラ軍はジャワ島へ略奪に出かけた。

1677年マタラム王アマンクラット1世の<sup>カハ</sup>苛政(→251)にジャワの貴族が反乱した際にマドゥラのトルノジョヨ王子は加勢にジャワ本島に押しかけてマタラムの王都カルタスラを占領した。王家のプサカ(→704)を略奪し東部ジャワに覇権を立てようとした。

マタラム王の要請を受けてオランダ東インド会社(VOC)(→272)が割り込んで以来、トルノジョヨ王子の戦いの相手はVOCとなり、1679年にVOCに敗れて捕らえられ処刑された。トルノジョヨ王子はジャワから見れば略奪者にすぎないが、バンテン王国、ボネ王国の支援を得ており反オランダ闘争という評価もある。

<sup>11</sup> <編者註>「チャクラニグラツ」のほうが現地の発音に近い。

VOC はマタラム王国に警戒を必要と感じる間は対抗勢力としてマドゥラを利用した。1740 年の紅河事件(→667)の波及でジャワ王室が反乱を起しかけた際にはマドゥラ軍はいち早くオランダの味方をして反乱の未然防止に努めた。

1743 年に VOC はマタラム王国からマドゥラ島の主権を譲渡された。これを機会にマドゥラ侯の存在を手に余ると見たオランダはカラニグラット4世を捕らえケープ植民地に流刑にした。マドゥラ島を VOC 直轄領土にし、カラニグラット家を島の東端のスムヌップに追いやって家名だけは残した。

オランダがマタラム王国を徹底的に弱体化し、もはや脅威を感じなくなった時、マドゥラの使いみちはジャワ支配の傭兵をリクルートすることであった。オランダとしてはマドゥラ島の産物よりも傭兵の供給源として魅力があった。マドゥラ人の精悍さとジャワ人に対するコンプレックスが利用された。

ジャワ人とマドゥラ人の関係は中国における漢民族と北狄ほくてきといわれた異民族の関係に思い当たる。塞外の貧しい遊牧民は軍事圧力をかけて貢ぎ物を入手した。かなわぬ時は中原に略奪に押しかけた。あるいは日本の戦国時代に阿波に基盤をおきながら中央(京都)の政権を壟断ろうだんした三好・松永一族の例えの方が好例かもしれない。

⇒151.マドゥラ島、614.マドゥラ人

## 264. バリ古代王朝

バリ島のトゥンガナン村(→660)北方にカキ・ドクン(Kaki Dukun)という石造物の遺跡がある。明日香村にある“猿石”といわれる謎の石造物とよく似ている。石造遺物はその他にもあり、古代バリ島の文化の基層は環太平洋文化、南太平洋文化と深く係わっているのでないだろうか。

先史時代の紀元前後の青銅器製の太鼓たいこが東南アジア一帯に拡がっておりドンソン文化(→011)といわれるが、ペジェン村のプナタラン・サシー(Penataran Sasih)寺院に直径3mに及ぶペジェン銅鼓が保存されている。

9世紀頃から歴史時代に入り、ジャワ島勢力がバリ島に浸透してきたことが石碑や銅板に記されている。王宮がウブド(→175)周辺のペジェン(Pejeng)村近辺にあったことからペジェン王朝ともいわれる。

当時の遺跡としてブドゥルウ村のゴア・ガジャ(Goa Gajah)遺跡は今世紀に発掘された11世紀頃の石窟寺院である。ゴア・ガジャ(=象の洞窟)の命名は象の化身ガネーシャ(→953)神の像にちなむ。しかしながら象はバリ島に生存したことはない。近くの沐浴場は1954年に発見された。イエ・プル(Yeh Pulu)遺跡は水田に接する崖の下の不便な所にある。25mに及ぶ岩壁にレリーフの絵巻物には宗教色は少ない。

タンパクシリンに近いグヌン・カウイ(Gunung Kawi)は11世紀の最も古い石窟遺跡である。インドと同じ様式の10の霊廟がある。遺跡はペジェン王朝の英傑ウダヤナ王(Udayana ? -1022?)の墓所と見られる。

ジャワ島とバリ島の関係は次第に密接になった。ウダヤナ王についてもクディリ朝(→245)の王族という説もある。ウダヤナ王はジャワのクディリ朝の王女を妻に迎え3人の息子をなした。長男アイルランガ(→333)はジャワに引き取られ、クディリ朝のダルマワンサ王の養子となり、一旦滅びたクディリ朝を再興した。

アイルランガ王の時代にジャワ文化がヒンドゥー教とともにバリ島にもたらされ、バリ島のジャワ化は一挙に進んだ。その後、ジャワ勢力は一時は退潮したが、マジヤパヒト王国(→248)が勃興し東南アジア海域に拡がる大帝国に発展した。1343年、ガジャ・マダ大臣(→335)の差し向けた軍によってバリ島は征服された。

その際に古代バリ王朝の最後のペジェン王国ブダウル(Bedulu)王はマジヤパヒト軍に対して魔力で対抗し

た。言い伝えによると、王は自分の首を切つてすぐに付けるという魔術を持っていた。いつものように遊んでいるうちに誤つて川に自分の首を落として流された。そこでやむをえず近くにいた豚の首を付替え“豚頭王”と言われた。王はその姿を恥じて塔に逼塞したままになり、ペジェン王朝は滅びた。

今日、伝えられるバリ伝説では古代バリ王朝の在来の王はマジヤパヒトに抵抗する得体のしれない化け物に位置づけられている。歴史は勝利者によって書き上げられる。日本神話の伝える神武天皇に抵抗した“土蜘蛛”と同じ扱いである。

## 265. バリの8小王国

14世紀にバリ島はマジヤパヒト王国(→248)に占領されてその属領となった。占領軍はバリ島東部に「ゲルゲル(Gelgel)王国」を創設し、デワ・アグン(Dewa Agung)を名乗つてバリ島を支配し、ジャワ島とバリ島の一体化が進んだ。ゲルゲル王国の最盛期はロンボック島(→212)、スンバワ島(→214)まで覇権が及んだ。

その後 1478 年にジャワ島ではイスラム教勢力によってマジヤパヒト王国が滅ぼされた際に王国の支配者は大挙してバリ島に亡命してきた。支配者と共に大勢の学者や工芸の技術者なども移住し、ヒンドゥー・ジャワ文化はバリ島へ移植された。

ジャワからの亡命者は《支配者＝バリ・マジヤパヒト》として《原住民＝バリ・アガ(→660)》に臨んだ。いわばバリ島はジャワの亡命政権<sup>12</sup>に乗っ取られた。第二次世界大戦後、中国本土から共産党に追われて台湾を乗っ取つた蒋介石の国民党政府とそっくりである。

以降のバリ島は独自の歴史よりはジャワ島との継続性を誇る。バリ島から見るとイスラム教に改宗したジャワ島ではジャワ文化の伝統が断絶した。従つて古代ジャワ文化の継承者はバリ王国ということになる。

16世紀後半、ゲルゲル王国が勢力を失い、次第に力を増していた旧マジヤパヒトの貴族につながる地方官は独立して小王国がバリ島に分立するようになった。策略でのし上がった地方の実力者がマジヤパヒトの名を騙っているだけで、必ずしも全てがマジヤパヒト貴族の後裔ではないらしい。

やがてゲルゲル王朝もクルンクン(→177)に移り小王国の一つになったが、数ある王国の中では宗主国としての地位を保つた。各王家は夫々の称号を持つがクルンクン王国のデワ・アグンの称号は最も格が高い。

分立した小王国は友好関係と敵対関係が交錯した関係にあった。権謀と術策に満ちた外交関係は日本の戦国時代と同じである。バリ島の統一王権がなく、小王国が分立したままの常態でバリ島はオランダの侵略を迎えた。いくつかの王国はププタン(→172)というバリ独特の華々しいフィナーレを演出した。

バリの分立王国は文化の拡散という点で評価できよう。王国は領土ではなく文化による威信を争つたのがバリ文化の特徴であり、文化人類学者ギアツ(→978)がバリ王国を“劇場国家”と命名した。各々の王国には盛衰の歴史があり、中でも王位継承をめぐる陰謀や暗殺やクーデターが日常茶飯事であった。平民は政治は貴族達の仕事としてマハーバーラタ(→947)のワヤン(→905)を実地で見るように楽しんでいたのであろう。

王国の数は絶えず増減していたが、オランダがバリ島を占領した際の8王国の状態を固定して現在のバリ州のブレレン、ジュンブラナ、タバナン、バドゥン、ギャニール、バングリ、クルンクン、カランアセムの8県になった。

⇒280.バリ島侵略

<sup>12</sup> マタラム王国のスルタン・アグンは 1639 年にバリ島を攻略したが敗北した。その子のアマンクラット1世は再度バリ島攻略を企てたが、VOC の反対で立ち消えになった。

## 266. カリマンタンの王朝



ムラワルマン石碑  
2011/7/16 編者撮影

東カリマンタンのマハカム河下流域のテンガロン(→194)近辺はかつての「クタイ(Kutai)王国」の所在地である。ムアラカマンでユーパ(Yupa)といわれる石柱 7 本のパッラワ文字(→960)で記載されたサンスクリット語の碑文が発見された。

4世紀後半から5世紀頃と推定される碑には、この地をムラワルマン(Mulawarman)王が支配しており、王国はヒンドゥー教に改宗し、黄金、牛を寄進したと記されている。ワルマンはサンスクリット語で“王”の意味である。

インドネシアでは西部ジャワのタルマ王国(→260)

と並んで最も古い王国の存在証明であるが、碑文以外に古代クタイ王国の歴史を伝えるものはない。スマトラ島でもなく、ジャワ島でもなく人口希薄なジャングルに被われた東カリマンタンにインドネシア最古のインド文明の王国があったことは不思議である。

マハカム河流域の黄金の産出がクタイ王国の基盤であったという説がある。とにかくインド文明の伝播チャンネルとしてマラッカ海峡(→032)が利用される以前は、クラ地峡でマレー半島を横断し、南シナ海を南下する伝播ルートが存在したのであろうか。

クタイ王国は歴史に再度、登場する。同じ地域に後のクタイ王国が存在したが、16世紀にイスラム教の攻勢により改宗した。18世紀になってブギス人(→617)が東カリマンタンに進出し、1726年ブギス貴族がクタイ王国を乗っ取った。

サラワク、サバ、ブルネイとカリマンタン(ボルネオ)島の北側に英国の手が伸びてきて、1844年英国人の冒険商人のムライ(Murray)がやってきてクタイ王国を挑発した。クタイ王国をめぐる英国とオランダの勢力争いの結果、クタイ王国は1844年にオランダに屈し保護領となった。1960年に廃されたクタイ王国最後のスルタンには妻 20 人がいた。これも上流の各部族との友好の絆<sup>きずな</sup>である。

バンジャルマシン王国は南カリマンタン州のバリト河流域にバンジャル人(→190)によって15世紀に成立した。1520年にイスラム化し、1787年にVOC(→272)の属領になった。その後、サラワク進出した英国に刺激されオランダは王国に積極介入を行うようになった。親オランダの王族をスルタン・タムジッド・イラに立てた際に住民が傀儡王に反乱したため、1860年、王国は消滅させられオランダの直轄領になった。

西カリマンタン地区は北のサラワクから浸透を図る英国勢力のブルック王に対抗してオランダはポンティアナック(→189)には土地の有力者の娘と結婚したアラビア人(→688)をスルタンに擁立した。18世紀のゴールドラッシュに沸く無法地帯ではスルタンを上回る勢力を有した蘭芳公司(→668)などが跋扈<sup>はつこ</sup>した。

第二次世界大戦中のポンチアナック事件(→308)で日本軍は親オランダのスルタン一族も処刑にした。インドネシア独立戦争はハーグ協定(→330)によって終結したが、オランダの画策した連邦共和国には西カリマンタンのスルタンが連邦の代表を務めた。

## 267. ゴワ王国

17世紀、スラウェシ島西南部の半島の中央部に1300年頃からの歴史を持つゴワ(Gowa)王国が栄えていた。同王国は北のタルロ王国との連合王国であり併せてマカッサル人の王国であることから、マカッサル王国とも呼ばれる。王都のソンバ・オプ(→201)は今日のマカッサルの南郊になる。イスラム教に改宗した港市国家であった。

ゴワ王国16代のハサヌディン王(Sultan Hasanuddin 1631-70)は幼児より聡明で王位継承権の低い中から王に即位(在位 1654-69)した。ハサヌディン王はゴワ王国の最盛期の王であり、東インドネシアの海陸に覇権を立てた。

香料貿易の中心であったマラッカ(→032)がポルトガル(→270)に占領されて以来、イスラム商人はヨーロッパ人の交易支配を嫌い直接、東方のマカッサルに進出してきた。マラッカが今度はオランダに占領されて以来、ポルトガル、イギリスなども直接マカッサルを訪れるようになり、マカッサルは香料貿易のセンターになった。

一方、ゴワ王国の交易船も香料諸島を航海するようになり、マカッサルは東方最大の港市となり、独占を図るオランダ東インド会社 VOC(→272)と対抗するようになった。VOC とゴワ王国間に緊張が高まり紛争から戦争になったが、1654年、1656年の戦いではハサヌディン王がVOCを破った。

覚悟も新たにVOCのスペールマン(Speelman)提督<sup>13</sup>は1666年に艦隊を引いてゴワの王都を攻撃した。その際に会社はゴワ王国に服従していたブギス人(→615)のボネ王国のアル・パラカ王を味方に引き入れた。ゴワ王国に隣接するボネ王国はブギス人の国であり、両王国は対立と抗争を続けていたからである。

海からのVOC、陸からボネ王国との挟み撃ちにあい、ハサヌディン王は敗れた。王が1667年に締結を強要されたのがブンガヤ(Bungaya)条約でもって60年に及ぶゴワ王国とVOCの抗争は終止符が打たれた。

条約の内容は、①マカッサル港におけるVOCの独占権を認める。②マカッサルからボネとビマ(スンバワ島)を解放する。③VOCへ賠償金を支払う。④人質をバタビアに送る。⑤マカッサルにVOCのロッテルダム城(→201)を建設する。というものでマカッサル人に交易への道を閉ざすものであった。

ゴワ王国の貴族は再起を期してスマトラ島、マレー半島の各地へ高飛びした。残るマカッサルの残党も1739年に蜂起したが失敗した。マカッサル人に刺激され、ブギス人の海外移住(→617)にも拍車がかかった。

ゴワ王国最盛期のハサヌディン王は“東方の雄鶏”として恐れられていた。闘鶏(→832)に見られるように雄鶏は勇猛心の固まりのような動物であり表敬の意味である。ハサヌディン王の名はオランダに抵抗した国家英雄(→344)としてウジュン・パンダンの国立大学や空港名になっている。

⇒616. マカッサル人

## 268. ボネ王国

ブギス人の故郷(→202)はボネ湾の奥であるが、生産力の高い南スラウェシ半島の東沿岸が中心となり、ソペン(Soppeng)、ボネ(Bone)、シンカン(Singkan)等に小王国が分立していた。ボネ王国の14代「アル・パラカ(Aru Palakka 1635-96)王」はブギス人の分立していた小王国群を統一した。

<sup>13</sup> スペールマン(1628-84)はVOCの最下級職員から昇進し最後は総督(1681-84)になった。提督として東インドネシアのボネ、テルナテ王国の地元勢力を制圧して香料貿易のオランダ独占化に寄与した

当時の南スラウェシ半島は16世紀に勢力を増したマカッサル人のゴワ王国によって支配されており、ボネ王国はこれに反抗するもハサヌディン王の率いるゴワ王国の勢力には及ばず、臣従を余儀なくされていた。

1660年、アル・パラカ王はゴワ王国に反乱するも破れたため、再起を期してブトン島(→209)へ逃れた。そこでゴワ王国を対立するオランダ VOC(→272)とは“敵の敵は味方である”として1663年バタビアへ行き、1666年、VOCの率いる海軍に同行し故地に戻った。

VOCは海上からマカッサルを攻撃し、アル・パラカ王の率いるボネ王国の残党は背後からゴワ王国を攻め、ついに宿敵ハサヌディン王を破った。

ゴワ王国とボネ王国の永年の反目は最終的にはVOCと組んだボネ王国の勝利となった。その後、ゴワ王国の残党のサンキラン(Sankilang)はVOCに反抗して敗れ、今はの際にゴワ王国の神聖なスダンガ(Sudanga)の剣をボネ王国に託した。ボネ王国はこれによりゴワ王国の正当な後継者になったと継承の正統性を主張している。

アル・パラカ王はボネ王国の隆盛を築いたブギス人の英雄である。ボネには王の銅像も立っている。しかしインドネシア正史ではオランダに抵抗したハサヌディン王を国家英雄(→344)として称え、オランダと結託したアル・パラカ王は無視されている。

VOCは東方貿易独占のためには競合するゴワ王国を抹殺せねばならなかった。ゴワ王国を葬ったことにより、VOCの香料貿易は独占舞台になった。結局、両王国の確執はVOCに利用されただけである。

南スラウェシの産物にはそれほど関心があったわけではないVOCは内陸支配はボネ王国に任せた。オランダにとってボネ王国が農業に専念している限り問題はなかったが、一線を超え交易に出てくると邪魔な存在であった。ボネ王国とオランダとの小競り合いはその後しばしば発生し南スラウェシ半島は荒廃した。

マカッサル人に続きブギス人の海外移住に拍車がかかったのは南スラウェシ半島の政情不安であった。ブギス人は東南アジア島嶼の各地で見られるが、マレー半島に移住した者は王家に食い込み、マレーシアの9家あるスルタン王家には多かれ少なかれブギス貴族の血を引いている。ボネ王国はマレーシアに移転したといえる。

今日ウジュン・パンダン近郊に存在するスルトンの宮殿が比較的新しいのは1930年代にオランダが人畜無害と見届けた上で再興させたものである。何れにせよ1955年に君主制は廃止された。

⇒615.ブギス人

## 269. テルナテ王国

スリウィジャヤ王国(→255)の交易商品に香料があり、ヨーロッパ人がくる前からマレーの商人が丁子(→056)を求めてマレー人はテルナテ島へ交易にきており、13世紀頃にマレー人が移住し王国を造った。ティドレ島(→229)の王国もほぼ同様であろう。

1257年、チコ・アリアス・バアブ・マシュール・マラモ王がテルナテ王国の開祖である。1450年にイスラム商人の影響を受けイスラム教に改宗していた。イスラム教は東に漸進していたが、香料貿易ルートにより一挙にテルナテ島にまで到達しており、これがまたイスラム布教の東端となっている。

丁子を求めて最初のヨーロッパ人であるポルトガル人(→270)がテルナテ島に来たのは1513年である。ポルトガル人は王に懇願して丁子を分けてもらいヨーロッパに持ち帰って大儲けをした。当時は第20代目のスルタンが島を支配していた。

次にポルトガルに遅れて海外進出にのりだしたスペインの派遣したマゼラン艦隊<sup>14</sup>はアメリカ側から太平洋横断の航海で香料諸島に辿り着いた。

テルナテ島の南にティドレ島に同じような王国があり、隣接する二つの小島は当初から覇権を求めて争っていた。成り行きからテルナテ王国はポルトガルと組み、ライバルである隣島のティドレ王国はスペインと連携した。ポルトガルとスペインの船が増え、丁子の販売で島の王国は裕福になる一方、丁子の支配権をめぐる各島の王国とポルトガル・スペイン勢、後にはオランダと英国が加わり、その時々<sup>がっしょうれんこう</sup>の目まぐるしい合従連衡と敵対<sup>15</sup>を繰り返した。

テルナテ島自身は小島であるが、王国は丁子交易から上る経済力でもって東インドネシアの海域を支配した。最盛時のテルナテ王国の覇権はマルク諸島からスラウェシ島・小スンダ列島全体に及んでおり、東南アジア海域ではアチェ王国やバンテン王国に匹敵する勢力を誇示した。

しかしポルトガル、スペインに遅れて香料貿易に進出してきたオランダやイギリスは地元の王国に取り入って丁子を分けてもらうのではなく、武力で王国を恐喝して丁子を強制的に売らせた。さらに香料貿易の独占を図るオランダは年金と引換えにスルタンを交易から退け、香料生産の直接支配にのりだした。アンボン島に丁子の集中生産を行い、余分の丁子を焼却して価格を支え、小島の管理しにくい丁子の木は切り倒した。

香料貿易から閉め出されたテルナテ王国の繁栄はつかのまの夢のごとく王都の島は南海のただの小島になった。しかしスルタンの家系は連綿と今日まで続いており、スルタン・ムダファル・シャー (Mudafarsa) 48世が健在である。

近年のアンボンのイスラム教徒とキリスト教徒の対立(→737)が1999年にテルナテ島にも波及し、イスラム教徒が圧倒的多数のためキリスト教徒が島から追い出された。その際にスルタンはキリスト教徒側に付いたためイスラム教徒住民の反発を受け、島を出てジャカルタでの逃亡生活<sup>16</sup>を余儀なくされている。

⇒228.テルナテ島

<sup>14</sup> マゼランの世界初の地球一周航海は5隻の艦船で出航し、3年後、丁子1トンを持ち帰ったが、丁子1トンはスペイン国王の投資に十分に報い、船員を裕福にする価値があった。

<sup>15</sup> テルナテ島では1522年にポルトガル抵抗して殺された25代スルタン・ハイルンと1575年ポルトガルをテルナテ島から追い出した26代スルタン・バブラの記念碑がある。二人の名はハイルン国立大学、バブラ空港にその名を残している。⇒キラキラ通信164号

<sup>16</sup> テルナテ島の48世スルタンの逃亡の経緯は小松邦康「インドネシアの紛争地に行く」に記載されている。スルタンがイスラム教徒に排除された理由は北マルク州独立にあたり政治野心からキリスト教寄りの姿勢をとったものと思われる。ちなみに2000年に北マルク県はマルク州から分離独立して北部マルク州へ昇格することになったが、新しい州におけるテルナテ島とティドレ島の覇権争いは今日においてもなお続いているらしい。